ラオスの子どもたちに教育を！

●経営革新塾しよう会講演会／その４

20 日夜の認定 NPO 法人シーエスアールスクエア理事長の宍戸仙助様のご講演「リタイヤ後は、利他 Years！ ～東南アジアの山岳少数民族の子どもたちの輝く瞳に学ぶ～」の続きを綴りましょう。

◇　◇

◆クラスター爆弾から子どもたちを守るために　【写真は当日撮影及び公式 HP 等より引用】

飯村君は、３歳から５歳までの子どもたちを集めて、本物のクラスター爆弾を見せて、「これを見たら絶対に触ったらだめだよ。これを見たら先生や家族に教えるんだよ」という教育をやっているのです。３歳から５歳までの子どもに何故？ それは、３歳から５歳までの子どもたちが平気で近寄れる場所にあるということなのです。いまだに 8,000 万個残っています。714 万人しかいない国に、8,000 万個のクラスター爆弾の不発弾があるんですよ。何故、こういうことがもっともっと報じられないのでしょうか。何故、みんなでもっともっと……何とかしたいですね。

クラスター爆弾の撤去は、これから 100 年経っても終わりません。それでもまだ違った場所で撤こうとしているのです。

◆ラオスの子どもたちに教育を！

現地の子どもは、教育を受けない子どもほど早く結婚します。13 歳から 15 歳くらいで結婚します。教育を受けると 16 歳以上と年齢が上がっていきます。13、14 歳の子どもが結婚し、赤ちゃんができると、山の中にあるこの小屋でたった一人で産んで、自分でへその緒を切って、後産を片付けて、おっぱいをあげて出て来なければいけないのです。「産み小屋」という小屋です。そんな習慣が残っている村がまだあるのです。だからこそ教育が大切なのです。無事に出て来られた子もいますが、無事に出て来られなかった子どももいるのです。だから教育が大切なのですね。

学校の開講式で、通訳のニャイさんを通じて「この子に大人になったら何になりたいかを聞いて」って頼んだのです。ニャイさんは聞いてくれないのです。そして先生を読んでラオス語でしゃべると、先生が違う言葉で聞いてくれました。それはニャイさんも知らない言葉でした。意味分かりますか。この学校はできたばっかりなので、全員がラオス語を知らないのですよ。普段、学校で使っているのは少数民族の言葉なのです。逆に少数民族の言葉を知らないと学校で教えられないのです。だから少数民族の言葉を分かる先生が、ここにはいる訳です。

その先生が初めてこの女の子に聞いてくれたのです。そうしたら、この子は「大人になりたい」と言うのです。私の英語が通じなかったのかと思って「この女の子が大人になったら何をやりたいのか」ともう一回聞いてもらったのです。やっぱり「大人になりたい」と、どういうこと？ その先生が説明してくれました。この女の子には４人の兄弟姉妹がいた。一番上の女の子、生まれてすぐに死にました。二人目の男の子、クラスター爆弾で吹き飛びました。三番目の女の子、はしかか何かで３歳で死にました。自分は四番目、「大人になるまで生きていたい。それが夢なのです」。大人になるまで生きていたいというのが夢？ 私は日本中の子どもたちに言います。「皆さんが大人になるのが当たり前だと思っているでしょう。それは日本に生れたからだよ」って、「皆さんは３歳から５歳までに、三種混合や五種混合ワクチンを打ってもらって、コロンになれば薬をもらえて、ちょっと病気になれば病院に連れていってもらって、だから元気に育っている。そして大人になれる。でも、ラオスでは３人に１人は死ぬんだよ」と、そんな現実があります。

その３年後に現地を訪れました。あの子がいました。ニャイさんに「あの子に大人になったら何になりたいのかを聞いてほしいの」と頼みました。そうしたらニャイさん直接、この女の子にラオス語で聞きました。何と３年でラオス語が通じたのですね。するとこの子は「先生になりたい」と。やったぁと、私は教員だったので嬉しかったのですが、よく考えてみると、この村でお父さんやお母さん以外で仕事を持っている人は先生しかいないのですね。だからだと思いますが、でも嬉しかった。

ある小学校で開講式をやっていました。この部屋よりも狭いところで、子どもたち、お父さんやお母さん、現地の人たち、村人、行政の人たちがみんな入って開講式をやっていました。私たちは、学校の脇に必ず井戸を１本掘ります。その井戸は学校のための井戸ではなくて、村人全体の飲料水になるからです。開講式をやっている最中に、その井戸から急に「ミャー」という女の子の泣き声が聞こえてきました。どうしたんだ。

木の窓を開けてみると、井戸で女の子が転んで泣いていたのです。助けてあげなきゃと思っていたら、お兄ちゃんがトコトコと来て助けてくれました。それがあまりにも可愛いので写真を撮ったのがこちらです。その夜、宿で写真を整理して、この笑顔、私が撮った写真の中で最高傑作と思って見ていたら、へんなことに気が付いたのです。お兄ちゃんの胸の真ん中ら何かくっついている。隣の隣の部屋がニャイさんなので、ニャイさんに「ちょっとこの写真を見てみて、このお兄ちゃんの胸の傷は何」と聞いたら、「きっと片方の肺を売らせられたんだよ」と。「エッ？ 子どもの肺を取って売る？ そんなバカなぁ、そりゃないでしょう。いくら何でも……」と思ってニャイさんの言葉をずうっと信じられなかったのです。いつか専門家に聞いてみたいと思っていました。そうしたら３年前の集団検診で私の心臓にはりついた出来物が見つかったのです。医師から今なら内視鏡で取れると言われて取ってもらいました。手術後の回診の時に、呼吸器外科の先生にこの写真を見てもらいました。「この傷で片方の肺を取れますか」って先生に聞いたのです。すると「このお兄ちゃんが小さい時に取ったのでしょうから取れるでしょう」と驚きました。間違いないんだ。確かにこのお兄ちゃんの左胸が少しへこんでいるのですね。実は、その他の子どもたちにも腰に傷がある子がいました。腎臓を片方売ったのでしょうね。お父さんやお母さんが騙されて売らせられたのでしょうね。ラオス語が読み書きできないお父さんやお母さんがうっかりサインしてしまったのでしょうね。「大丈夫だ、みんなやっているんだから、あいつもやっているし、こいつもやっているから、いいから早くサインしろ！」といった調子だったのでしょう。もちろん帰ってこなかった子どももいるのでしょうね。

ラオス国内では取れませんのでね。呼吸器外科の先生は「最近の麻酔は片方の肺だけを動かなくできるのですよ。宍戸さんもそうやってお出来を取りましたから」と説明されました。このお兄ちゃんもそうやって取られたはずですよ。それだけの医療技術がある国で肺を取ったということです。

これは４つの教室です。この黒板の裏にも黒板があって、実は 13 年前にこういう目の前に立ってしまったのです。こういう子どもたちの目の前で、私はギターを弾いて私がいた学校の校歌を歌うはめになっちゃったのです。その瞬間にこの瞳の輝きを、日本の子どもたちにももう一回取り戻す、それが私の退職後の仕事だと決めました。

ベトナム・ラオスなどの山岳少数民族の教育環境に恵まれない学習環境の改善のために.

実は新しい学校にいる子どもたちは、全員が１年生なのです。みんなが１年生なのです。もちろん落第もたくさんあります。写真に写っている生徒たちはみんなが綺麗な服を着ています。お金がないなんて嘘じゃないと思ったのですが、ニャイさん「Only Today。今日だけ」だと言うのです。「何が今日だけなの？」と聞くと、この制服は外国人が来た時だけ着られる国から配られている制服なのです。私たちは１か月前に連絡して、何月何日何時にこの学校に行くと決まっていますから、制服を着ていられるのです。普段は土色に染まったＴシャツとボロボロのズボン、スカートなのです。普段は、こういう学校にお父さんやお母さんが混じってラオス語の勉強しているのですけれども、私たちが行くときは出て来ないのですね。ある時、隣村の学校に１人の男の人がいたのですよ。偉いなぁと思ったのですが、３年後にその村に行ったら、そこの村長さんになっていました。なるほど、ラオス語の読み書きができなかったら村長はできないですからね。

みんなが泥の中に浸かって遊んでいる写真です。どうですか、幸せそうでしょう。全身が泥パックです。この子たちがいい表情なので Facebook に挙げたら、この子がパンツを穿いていないからと消されました。この子どもたちの笑顔を見たら、本当に幸せなのは日本の子どもたちなのだろうか、ラオスの子どもたちなのだろうか、分からなくなってしまったのです。幸せって物じゃないんですよね。金じゃないんですよね。でも、この女の子や男の子たちがこの笑顔で幸せでいるためには３つの条件があるのです。一つ目が病気にならないこと。二つ目が災害がないこと。三つ目が戦争がないことです。こんな時にウクライナで……。

◆日本の子どもたちが建てた学校

これはラオスのチャンヌア小学校なのですが、日本の子どもだけのお金で学校が建ちました。町田市立南大谷小学校、福井県丸岡中学校、岡山県柏島小学校、武蔵村山第一小学校、第八小学校、私が居た福島県東舘小校長の子どもたちがお金を出し合って建てた学校です。私たちが学校を作る時には必ず井戸を１本掘ります。そして、私たちが学校視察に行くときには必ず最初に井戸を見ます。ある学校で雨季に行ったら水が出るのに、乾季に行ったら水が出ない。そこで学校の裏山に行ったら、川の水が黄色く濁っているのです。こんな水を飲んだら死んでしまうよと思いました。そんな話を帰国後に全校集会でやってしまったのです。そうしたら翌日、校長室の扉を叩く子が子がいるのです。　《つづく》